

[第1分科会 国際理解教育]

研究テーマ 玉川学園小学部における国際理解教育の実践

——子どもたちの夢を育む豊かな交流を目指して——

玉川学園小学部

英語科教諭 小川 恵子

I はじめに

創立75周年を迎える玉川学園では、建学以来国際理解教育に力を注いできた。「玉川教育の12信条」にも「国際教育」を掲げ、「地球はわれらの故郷である」という言葉を自分のものにできる子どもの育成に取り組んできた。特に95年以降は、コンピュータ・ネットワークの進歩とあいまって、国際交流活動が盛んになり、これまで海外の11校の学校と様々な形で交流してきた。これと並行して、交流活動をより豊かなものにする研究も進めてきた。

II 目標と方法

- 1 交流活動の目標の検討：玉川学園小学部では以下の3つを大きな目標としている。
 - (1) 相互理解：異文化の尊重に加え、自国に対する理解、誇り、愛情を持てる心や態度を育成する。また自分を取り巻く社会での相互理解の精神を養う
 - (2) 共存・共生：連帯感や協力の精神を育成する。また共に生きていくことの重要性を知り、実践的態度を培う。
 - (3) コミュニケーション能力：自分の考えを持ち、これを表現し、互いに意思を伝わせていく能力や態度を育成する。
- 2 交流方法の検討：相手校の担当者と、互いの環境や状況を踏まえて検討する。
 - (1) テレビ会議
 - (2) Eメール
 - (3) ウェブページ
 - (4) ポスター、カード、手紙、作品の交換
 - (5) 相互訪問
- 3 児童へのリサーチ：交流を通しての気づきや発見、意識の変革などがあつたか、アンケートを取るなどしてリサーチする。そしてその結果を児童にフィードバックする。

III まとめ

現在交流している8校の中でも、環境をテーマに共同学習を推進しているハーカー校（アメリカ）とは、テレビ会議、Eメールの交換のみならず、児童の相互訪問も実現させている。これは、テレビ会議やメールで知っている友だちに実際に会ってみたいという子どもたちの夢が実現した結果である。子どもたちの夢を育み、それを実現する力を私たちは持ちたい。

第2部 国際理解教育

1 玉川学園における 国際理解教育の歩み

「地球はわれらの故郷である」

この言葉は、スイスの思想家ヴェルナー・チンメルマン博士の言葉である。

この言葉に象徴されるチンメルマン博士の思想とその運動に共鳴された小原国芳先生は、博士との親交を深めて4度にわたって博士を玉川学園に招聘し、また博士に招かれてヨーロッパ各地で講演もされた。そして、「地球はわれらの故郷である」と言う標語は玉川学園の子ども達に多くの夢を与え、国際人としての自覚を高めさせてきた。

昭和30年頃に明文化された「玉川教育の12信条」にも、「国際教育」を掲げ、次の様に述べられている。

心の友チンメルマン博士の「地球はわれらの故郷である」とは心からの叫びでした。

「玉川は第二の故郷だ」と喜んでくれました。世界各国からの知名の士の来園、近くは韓国、中国、東南アジアからの学生たち……ホントに私たちは心から世界人に親しむことのできることを感謝しています。子どもの心を通して、マコトの平和な世界を作り上げたいのです。（『玉川教育——玉川学園三十年』1960. p. 26.）

学校教育に於ける国際理解教育の重要性は、玉川学園創立の当初より、明確な教育方針として掲げられていたと言える。玉川創立の翌年（昭和5年）に刊行された『玉川塾の教育』には、次のように記されている。

吾々日本人が何よりも心すべきことの一つは、国際心の養成だと思ひます。世界平

和のために心から親しい温い友情が外交の根底にあってこそ、魂が通ずるのだと思ひます。

出来るだけ、日本心、東洋心をハッキリ把握せしめ、浄化せしむると同時に、外国の人々にも接せしめたいと思ひます。外国人の教師は語学のためよりは、その広い世界心の養成を主といたしたいのです。

いわんや、外国の「第一人者」を迎へることは非常な貴い感化を与へられます。

第一人者に接したという気宇、握手したという胸の高鳴り、話が通じたという、少年らしいうれしさ、吾々の学園が呼んだのだという誇り、実に容易に想像出来ぬ貴いものが得られるのです。（『小原國芳全集11巻』p. 212.）

昭和4年に玉川学園が創立された時から男子の制服は背広と定められた。今でこそ、中学や高校での背広の制服は珍しくも無いが、昭和の初め頃には非常に稀な事であり、生徒達は制服を着て町に出ると衆目を集めるので恥ずかしい思いをすることもあったようである。しかし、たとえ小中学生であっても、一人前の人間として尊重されるべきであるし、世界中の人々を相手に堂々と付き合っていくことのできる人間を育成するためには、それなりの服装を着こなすセンスを身に付けなければならない、また、そうすることによって国際人としての心も養われるという理由で、背広を男子の制服と定めて今日に至っている。

また、小原先生は数回にわたる海外視察を通して、街頭を闊歩する欧米人の姿勢の良さに比べて、下を向いて歩く日本人の姿勢の悪さに気付かれた。そして、外国の人々とも自信を持って心を通じ合える人間に育て上げる基本として、

良い姿勢で歩ける子どもを育てたいということから、毎朝の朝会での行進の指導を提案され、今日まで実践され続けている。

国際理解教育推進にあたってまず必要になるのは、語学力の育成であることはいうまでもないことである。玉川学園では外国語の指導にも非常に力を入れてきており、小学部創立の頃から低学年からの英語教育を実践してきた。現在は小学3年から英語の指導を行っているが、「読み書き」を中心とした受験英語ではなく、「聞く話す」を中心として、外国の人々とも進んで交流できる心を育てることをねらったものである。英語の発音を聞き分け、臆せず発音する能力は年齢の低いこの時期から行うのが効果的であるとの考えにたっている。

また、玉川の国際理解教育は、欧米に学ぶという側面だけでなく、アフリカのシュバイツァー博士の病院に子ども達の献金で医学用の顕微鏡を送ったり、玉川の卒業生が孤軍奮闘しておられる西アフリカ・シエラレオネの学校に20年以上にわたって文房具を送り続けたりという奉仕活動なども行って、世界の一員としての心、またアジアの一員としての自覚の育成に努めてきた。

こうしていくつかの例を通して考察してみると、「国際理解教育」という特別の分野があるのではなく、玉川学園が建学以来一貫して実践してきた全人教育そのものが国際理解教育であるということに気付かされる。一人ひとりの子どもの個性を大切に、日本人としての誇りを持った心の豊かな人間に育てる教育が、すなわち国際理解教育であると言えるのではないだろうか。

以上のように、玉川学園における国際理解教育は、創立当初から明確な方向が示され、一貫した指導が積み重ねられて来たと言える。

そして、ここ数年来、加速度的に充実して来ているのが「国際交流」を核とした国際理解教育の推進であると言えよう。玉川学園では、オーストリア・スキーのハンネス・ジュナイ

ダー教授やクルッケン・ハウザー教授、またデンマーク体操のニルス・ブック教授等の招聘を初めとして、多くの外国の第一人者を招いて来たとし、児童生徒も含めた演劇等の海外公演・体験留学等の国際交流の場も積極的に導入されて来た。

しかし、日常的に海外の子ども達と交流を深めようとする動きは、コンピュータを中心とした情報手段の急速な進歩によって可能になってきたものであり、国際理解教育は国際交流活動を通して、ここ数年の間に飛躍的に進展してきている。

幼い時から外国の子どもと自由に接する機会を持つことは、子どもの国際心育成の上ではかり知れない大きな力を発揮してくれる。

このような視点に立った国際交流活動の指導の実際はこの後に詳しく述べられるが、ここ数年の動きとして、直接児童への指導とは異なった立場から特筆しておきたいことが2点ある。

一つは、The Harker School (ハーカー校)を中心とした外国の学校との交流活動を行う場合は、児童の交流だけではなく、教師間の交流も大切にしていることである。ハーカー校の子ども達が来園した場合は、引率の教師と本校の教職員との研究協議の時間を設けており、カリフォルニア州の中でも指導的立場にあるハーカー校の先生方と率直に意見を交換する機会が持てることは私どもにとって貴重な研修の場になっている。米国の教育がかかえる様々な問題点も具体的に語ってくれるし、アメリカの教師から見た日本の教育・玉川の教育に対する忌憚りの無い意見も聞かせてもらえる。こちらからハーカー校を訪問した場合も同様の機会に恵まれ、すでに延べ20数名の教員がハーカー校を初めとするアメリカの先進校を訪問し、研鑽を深める機会に恵まれている。そして、これらの教師間の交流を通して私どもが最も印象深く学ばされることは、彼等のオープンマインドな生き方である。プロの教師として厳しく自分を磨き、その自信を持ちつつも、子どもに対しても私ど

もに対しても心から相手を受け入れ、全身で歓迎の気持ちを表現しながらコミュニケーションを深めていく姿には、これからの教育者として何を大切にしなければならないかの示唆を与えられる。

もう一つは、永年の課題であったネイティブの英語教師の招聘を実現することができたことである。玉川学園と米国のセントマイケルズ大学との間に、同大学の大学院においてESLを専門的に学んだ教師の派遣の協約が結ばれ、1999年からエリカ・ヘンドリックス女史が本校専任教諭として招かれた。彼女はAETとして英語教師との密接な協力体制による英語の指導にあたり、あらゆる教育活動の場に積極的に参加し、全校の子ども達に簡単な英語で話しかけ、また、子ども教師からは日本の生活・文化を吸収しようと慣れない日本語で何でも質問してくれる。子ども教師集団の中に彼女が加わったことは、単に英語教育の充実の面だけでなく、異文化理解、人間理解の拡がりに新たな可能性を感じさせてくれている。

(菅野勝治郎)

2 小学部における国際理解教育の方向

(1) 国際理解教育の目標

次世代を担うこれからの子ども達は、地球市民の担い手として活躍が期待されている。

我々は、世界の子ども達が地球市民の一員として、豊かな心を持ち、平和を愛し、豊かな社会を創り上げていこうとする願いを大切にしたい。

そして、1章の冒頭でも述べられているように「地球は我らの故郷である」という大きな夢に向かって羽ばたいてほしいと思う。

このような目的のもとに、小学部としては、次のような目標を持って国際理解教育を実践していきたい。

① 相互理解

- ・異文化理解の尊重に加え、自国の歴史・文化を理解するとともに誇りや愛情を持てる心や態度の育成

- ・自分を取り巻く小さな社会の中で基本的な相互理解の精神を培っていく。

相互理解の根底には、互いの良さを認めあい、互いを信じ合い、尊敬し、愛し合う Human relation, さらに他者のために奉仕することのできる心がなければならない。そうした心がなければ、それは自国の文化や異文化に対する知識や理解の範囲に留まり、生きた真の国際理解には進展していかないと考える。

② 共存・共生

- ・お互いが繋がり合っていこうとする連帯感や、共に助け合っていこうとする協力の精神の育成。

- ・相手の立場になって考えたり共感することのできる温かい心の育成。

- ・相互に依存し合い、共存し共に生きていく(共生)ことの重要さを知り実践的態度を培う。

- ・広い視野を持ち、地球の一員としての自覚と責任を持った人間の育成。

- ・一人ひとりが互いに手を取りあいながら、家庭や学校、地域や社会の中で、豊かな地域や社会さらには未来社会を創造し、地球人として豊かに生きていけることを願う心の育成。

アルベルト・シュバイツァー博士が「人間はみな兄弟」と言われたように、これからの次代を担う子ども達には、地球人の仲間として、友達として共に生きる(共生)ことの大切さを理解し感じ取らせていきたい。そして「地球が故郷」と感じる感性豊かな子ども達を育てていきたい。

③ コミュニケーション能力

- ・子ども達の自主的、主体的な学び方や話しあい討議するコミュニケーション能力を高め育てる。

- ・自分で考える力、自分で意思を決定する力、

他人と違う意見を主張する力の育成。

- ・自分の考えをはっきり持って表現し、互いに意思を通い合わせていく能力や態度の育成。

- ・コミュニケーション・ツールとしての英語を身につけさせる。

今回の学習指導要領改訂に伴い「教育課程の改善のねらい」の中に「知的好奇心・探求心をもって、自ら学ぶ意欲や主体的に学ぶ力を身につけるとともに、試行錯誤をしながら、自らの力で論理的に考え判断する力、自分の考えや思いを的確に表現する力、問題を発見し解決する能力を育成し、……」と述べられている。

今後、今まで以上にコンピュータ教育は学校教育の中に浸透してくるであろう。それにともない、国内外の学校で互いに情報交換をしながら学習を進める機会も多くなる。そこでは、お互いの考え方や意見に耳を傾けながらも、互いに主張が違う場合には考え方をぶつけ合うことも必要になってくる。

それゆえに、個々の特性を生かしながら、自発的で発信型の子どもの育成に努め、個々のコミュニケーション能力を高めていくように努力しなければ、これからの国際競争には生き残れないであろう。

(2) 国際交流を中心とした国際理解教育

国際化が進む中であって、国際理解の必要性を問われてすでに長い歳月を経てきた。特にここ十数年、科学技術の進展により通信ネットワークが急速に発達し、社会の動きは今まで以上に活性化し海外との交流も盛んになり、政治、経済を含め多くが国際的、地球的規模で動き始めてきた。

さらに、日本には外国人居住者や就労者も年々増え続け、地域社会の中でも外国人と接することは日常的になり、市民レベル・個人レベルでの交流も一層盛んになってきた。こうした、加速度的な国際化の流れにあって、次代を担う子ども達の教育もまた国際理解教育がより重要な意味を持ち始めてきた。

国際理解教育については、本校では先の目標に向けて実践を積み重ねてきているが、これは創設以来全人教育の理念のもとに、様々な教育活動の中で具体的且つ積極的に実践されてきたものである。

ここ数年、ハーカー校や Yujin Gakuen (友人学園), Richmond Elementary School (リッチモンド小学校) などの海外の学校との交流が盛んになってきた。特にハーカー校とはEメール交換、テレビ会議、交換授業さらには相互交換訪問にまで実践が広がってきている。本校では、こうした海外の学校との交流を通して、世界の国々の友達と共に手を取りあって共に生きていく喜びを共有しながら、夢と希望と愛に包まれた地球人として生きていけることを願っている。

そこで本稿では、国際交流を通して子ども達がどのような活動をし高まりを得られたかに焦点をあてた実践報告をしたい。

(3) 総合的な学習の扱いについて

本稿の「はじめに」の中で「総合的学習」について次のような基本的な考え方が述べられている。

高学年の場合、生活と学習を総合的に扱うというよりも、この時期児童に学習させたいテーマが教科の枠におさまらないもの、即ち環境、国際理解、情報という既存の教科の枠では規定できない領域の内容を単独に、あるいは総合的(領域をまたがる場合、領域と教科を総合的に扱う場合などいろいろ考えられる)に扱うが故に総合的学習なのである。

このことから、国際理解教育の立場から総合的学習は次のように考えていきたい。

まず本校の場合、先に述べたように国際理解教育は国際交流を中心とした理解教育と捉えるため、訪問校の滞在期間中の活動が主体となる。

例えばハーカー校(ハーカー校訪問は5年生の段階で、受け入れ学年は6年生)が来園する

前後は、6年生の代表歓迎セレモニースタッフを中心として6年生全員及び6年生関係の先生方による受け入れ準備、さらに滞在期間中の特別時間割として歓迎・お別れセレモニー、教科学習や日本文化の紹介や体験学習、両校の環境学習の発表等々が計画される。

こうした一連の内容は、「既存の教科の枠では規定できない領域の内容」として考えられる。さらに前後してのEメール交換、テレビ会議、交換授業など英語科とリンクしながら進められるこれらの学習は、高学年における総合的学習の一例として考えられる。

こうして国際理解教育における総合的学習は、ハーカー校の例でみられるように、前後の活動と交流期間中の特別時間割による活動を含めた形で目標を設定し、総合的学習を運営していきたいと願っている。

このほか友人学園やリッチモンド小学校（アメリカ・オレゴン州）、キャンベラ・グラマースクール（オーストラリア）との交流もあるので、国際理解教育としては、このように交流を絡めた活動を通して総合的学習を展開していきたい。

なお今後こうした交流校との活動を年間のカリキュラムの中で明確に位置づけていきたい。

(4) 英語の学習との関わり

国際理解教育は英語学習との関わりが極めて重要である。外国のお友達やお客様が来られれば、使用語は多くが英語である。

本校においては3年生から英語を週2時間学習をしている。ハーカー校や友人学園などの交流が盛んになるにつれて、子ども達の英語を通しての触れ合いも多くなる。自然英語への興味や関心も高まってくる。

その第一歩として、高学年（4年生）からはEメール交換が始まる。外国のお友達との付き合いの第一歩が始まる。6年生くらいになるとメールの送信や受信も辞書を引きながら次第に自分の力でやろうとする子どもも出てくる。

次代を担う子ども達は、バイリンガルを要求される時代でもある。そのためにも子ども達には国際交流を通して、外国語の必要性を実感してほしいと思うし、今までの交流の経験をもとに、今以上にコミュニケーション・ツールとしての英語をどのように高め育てていくかを考えなくてはならない。（川本 覚志）

3 実践例

本章では、玉川学園小学部の国際理解教育の実践の様子を、交流活動を中心に紹介する。まずはじめは本校と姉妹校提携を結び、現在最も活発な交流活動を行っているハーカー校との交流について、次に、1998年から1999年にかけての4,5,6年生の国際交流の一年間の活動概要、そして最後に交流活動と英語の指導との関わりについて述べたい。

(1) ハーカー校との交流

① ハーカー校との共同学習

ハーカー校について

ハーカー校はカリフォルニア州サンノゼにある私立の学校で、幼稚園から高校までの約1000人が通っている。創立100年を越える歴史のある学校で、2年前まではK-8の教育プログラムを展開していた。1998年にハイスクールを増設し、現在は10年生までが在学している。あと2年でK-12のプログラムが完成し、ハイスクールの卒業生が誕生する。卒業生のほぼ全員が大学進学を目指し、近くのスタンフォード大学やカリフォルニア大学バークレー校、あるいは東部のリベラルアーツカレッジへと進んでいくためのプレップスクールだといえる。シリコンバレーに位置するために、父母はコンピュータ関連の職業の方が多いので、コンピュータやテクノロジーを活用した教育実践に対する要望